文京遺跡５３次・54 次調査　現地説明会資料

平成 25 年 11 月 30 日（土）

所 在 地：松山市文京町２番１の一部
調査面積：53 次調査　　819㎡
　　54 次調査　1,079㎡
調査期間：53 次調査　平成 25 年　7 月 8 日（月）～同年　8 月 30 日（金）
　　54 次調査　平成 25 年 10 月 1 日（火）～同年 12 月 13 日（金）〔予定〕
調査要因：53 次調査　松山市立東雲小学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
　　54 次調査　松山赤十字病院改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
調査主体：公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター

第１図　周辺遺跡分布図

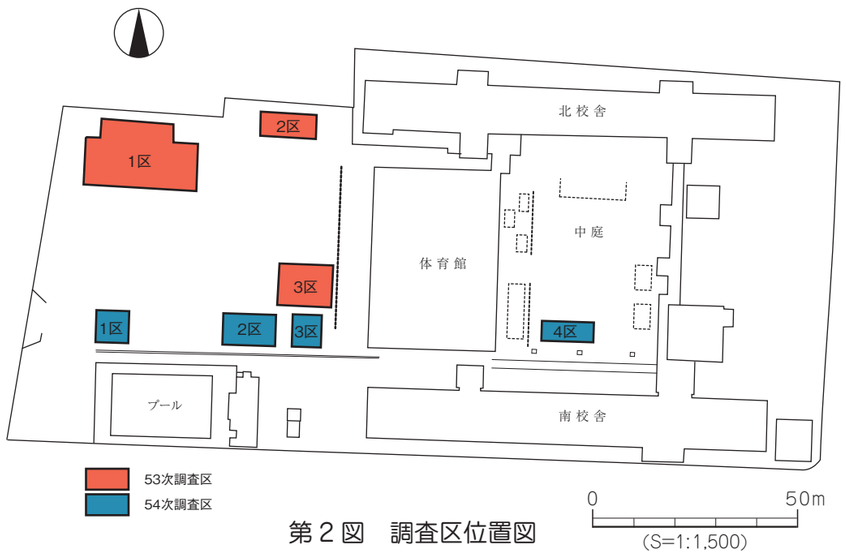
＝　略年表　＝

B.C.三万	B.C.一万三〇〇〇（B.C.一万一〇〇〇）	B.C.三〇〇	二〇〇	三〇〇	四〇〇	五〇〇	六〇〇	七〇〇	八〇〇	一一〇〇	一三〇〇	一四〇〇	一五〇〇	一六〇〇	一七〇〇
きゅうせっき 旧石器時代	じょうもん 縄文時代	やよい 弥生時代	こふん 古墳時代				あすか 飛鳥時代	なら 奈良時代	へいあん 平安時代	かまくら 鎌倉時代	むろまち 室町時代		あづち・ももやま 安土・桃山時代	え ど 江戸時代	

１．はじめに

文京遺跡 53 次・54 次調査は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『№.67 文京遺跡（樋又遺跡・元練兵場遺物包含地）』内における発掘調査（53 次調査：公共、54 次調査：民間）です。調査地が所在する松山市文京町は、松山平野内でも有数の遺跡地帯である道後城北遺跡群内にあり、文京遺跡（愛媛大学構内）や松山大学構内遺跡をはじめ数多くの遺跡が発見されています。なかでも、文京遺跡は昭和 50 年度に第 1 次調査（工学部構内）が行われ、これまでに 52 次の調査が継続的に実施され、縄文時代から近世に及ぶ集落跡や生産跡が確認されています。

縄文時代では、文京遺跡 24 次調査（理学部構内）にて前期末の土器が出土したほか、11 次調査（法文学部）や 27 次調査（工学部）などでは縄文時代後期の土器や焼土、炭化物が確認されています。弥生時代になると、4 次調査（東中学校構内）にて前期の竪穴住居址が検出され、その後、中期から後期には竪穴住居をはじめとする集落遺跡が数多く発見されています。古墳時代を通しても継続的な集落経営がみられますが、古代から中世の段階では水田跡や畑跡などの生産遺跡が発見されています。



第２図　調査区位置図

文京遺跡 53 次調査の概要

1．検出遺構

溝　　：　4 条〔鎌倉時代～室町時代〕
自然流路：　1 条〔鎌倉時代～室町時代〕
柱　穴　：　155 基〔鎌倉時代～室町時代〕

2．出土遺物

縄文土器（後期～晩期）、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、動物骨

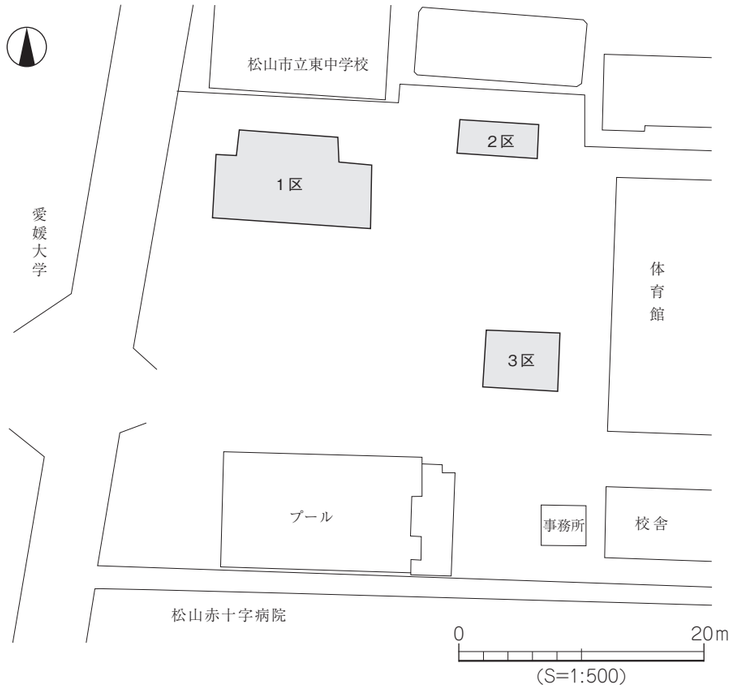
3．わかったこと

今回の調査では、中世段階の遺構や遺物のほか、縄文時代の遺物を検出しました。1 区では、最大幅 3m、深さ 80cmを測る南北方向の溝 SD101 が検出され、溝からは中世、室町時代の土師器土釜や擂鉢のほか牛の臼歯などが出土しました。なお、溝内には径 1 ～ 5 cm大の礫を含む砂のほか、基底面付近には拳～人頭大の大型礫がみられたことから、激しい水流があったことが伺われます。調査地北側にある文京遺跡 4 次調査（松山市立東中学校構内）では中世段階の自然流路が検出されており、SD101 はこの流路から取水するための基幹水路として機能していた可能性があります。また、2 条の溝（SD102・103）も中世段階の水路と考えられます。このほか、SD104 は東西方向にのびる溝ですが、検出状況から畑耕作に伴う鋤跡溝と考えられます。水田跡や畑跡は検出されませんでしたが、調査地や近隣地域は中世段階に耕作地として土地利用されていたものと推測されます。一方、3 区では自然流路 SR301 を検出しました。試掘調査の結果、1 区南側を東西方向に流れる自然流路が検出されており、SR301 は、その一部分と考えられます。

溝や流路以外では、多数の柱穴を検出しました。とりわけ、2 区検出の柱穴内からは中世段階の土師器土釜や瓦質の釜などの破片が出土しています。残念ながら建物址は検出されませんでしたが、近隣地域には該期の建物が存在する可能性が高いものと考えられます。

縄文時代の遺物は、基本層位の第Ⅷ層黄色シルト層から出土しました。明確な遺構は検出されませんでしたが、縄文時代後期や晩期に時期比定される土器のほか、サヌカイト製の石鏃やスクレイパーなどが出土しています。

写真 1　調査地全景（西より）



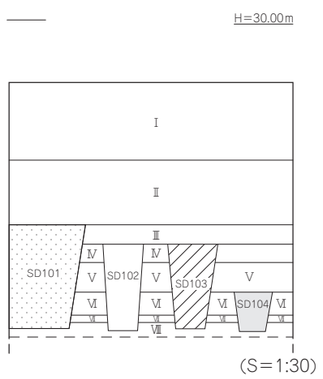
第 3 図　調査区測量図

【基本層位】
第Ⅰ層：近現代の造成土
第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う客土
第Ⅲ層：中世段階の堆積層
第Ⅳ・Ⅴ層：古代～中世の堆積層
第Ⅵ・Ⅶ層：弥生～古墳時代の堆積層
第Ⅷ層：縄文時代の堆積層

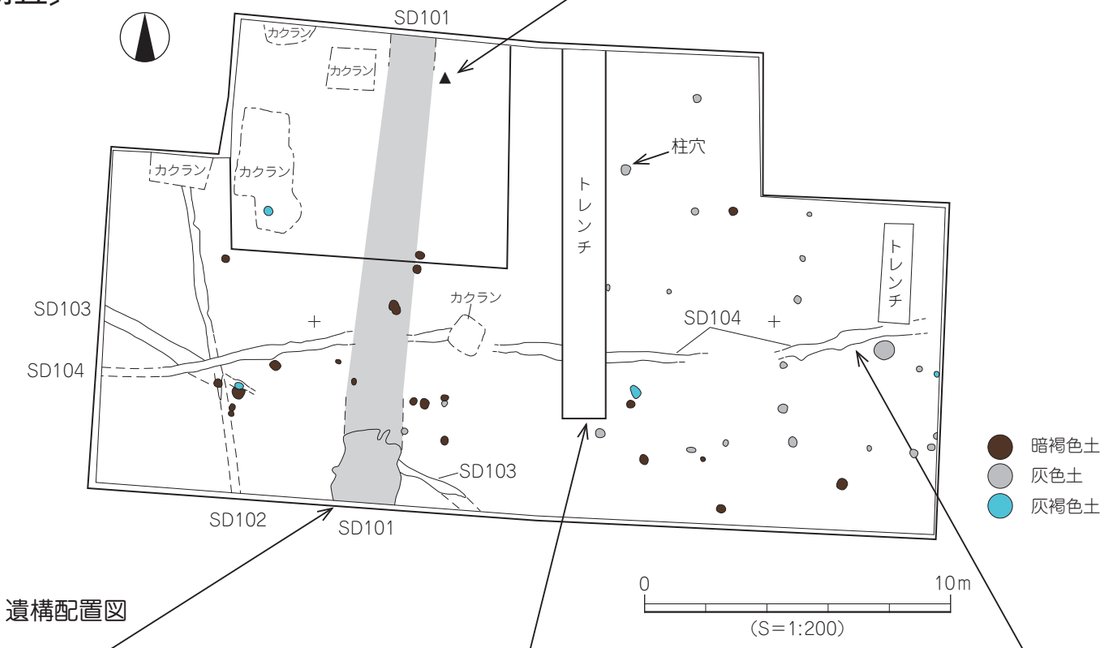
写真２　１区完掘状況（東より）

写真３　１区縄文土器出土状況（北より）

〔１区の調査〕



Ⅰ　造成土　　Ⅴ　褐灰色土
Ⅱ　耕作土　　Ⅵ　灰黄褐色土
Ⅲ　白灰色砂質土　Ⅶ　暗褐色シルト
Ⅳ　灰黄色土　　Ⅷ　黄色シルト



第４図　１区柱状土層図・遺構配置図

写真４　１区 SD101 断面（北より）

写真５　１区トレンチ土層（南東より）

写真６　１区 SD104 検出状況（西より）

〔２区の調査〕

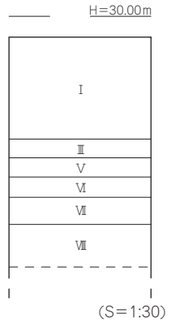
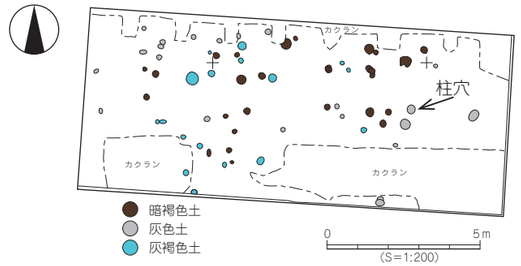


写真７　２区完掘状況（西より）



第５図　２区柱状土層図・遺構配置図

〔３区の調査〕

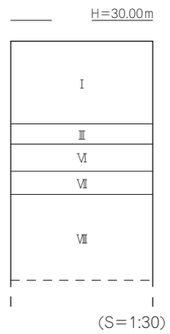
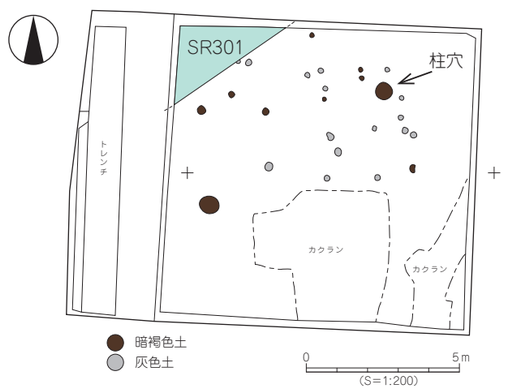


写真８　３区完掘状況（北より）



第６図　３区柱状土層図・遺構配置図

文京遺跡 54 次調査の概要

1．検出遺構

溝　　：　1 条〔鎌倉時代～室町時代〕
土　坑　：　1 基〔時代不詳〕
柱　穴　：　30 基〔鎌倉時代～室町時代〕
自然流路：　2 条〔弥生時代～室町時代〕

2．出土遺物

縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト片、銭貨、動物骨

3．わかったこと

調査では、主に中世段階の遺構を検出し、縄文土器や弥生土器、土師器が出土しました。

1 区：SD101 は、断面形状がU字状に掘られた人工的な溝であり、直線的にほぼ真北方向に延びており、北側は 53 次調査検出の溝 SD101 につながる溝であることが分かりました。また、第Ⅷ層黄色シルト層上面にて柱穴を検出し、第Ⅷ層中からは縄文土器片やサヌカイト片などが出土しました。

2 区：第Ⅷ層上面にて柱穴を検出しましたが、建物址は確認できませんでした。第Ⅷ層中からは、縄文土器片や焼土の塊などが調査区東側から出土しました。

3 区：第Ⅷ層上面にて、土坑 SK301 や柱穴を検出しました。SK301 内には焼土の塊が密集した状態で入っており、僅かに炭化材が見つかりました。土坑の底面は焼けており、この土坑で火が使用されていたことが考えられます。調査区東壁付近では、第Ⅷ層中から 3cm ～拳大の礫が密集した状態で検出され、その周囲からは縄文土器片が僅かに出土しました。

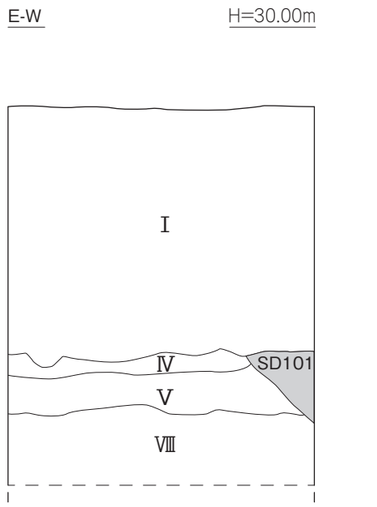
4 区：第Ⅷ層が南西方向から北東方向に下がる急傾斜面にて、自然流路 SR402 を検出しました。調査区北側には西流する旧流路の存在が想定されていますが、その南岸部分と考えられます。流路底面付近に堆積した砂礫層からは、弥生土器片や土師器、須恵器片が出土しました。SR402 の上層には、南岸に沿うように小流路 SR401 を検出しました。SR401 は、出土した土器から中世頃に機能していたことが窺えられます。

今回の調査では、第Ⅷ層中より縄文時代の土器や焼土の塊を検出したことから、調査地内には縄文時代集落の存在していたことが窺えられます。弥生時代の遺構は確認されなかったことから、旧流路南岸付近は集落周辺の空間区域であったと想定されます。中世の溝は水路施設の可能性をもち、当時は耕作地として土地利用されていたと考えられます。

写真９　１～３区全景（西より）

写真 10　１区第Ⅳ層上面遺構の完掘状況（北より）

〔１区の調査〕



（S＝1:20）

Ⅰ　造成土　　Ⅴ　褐灰色土
Ⅱ　耕作土　　Ⅵ　灰黄褐色土
Ⅲ　白灰色砂質土　Ⅶ　暗褐色シルト
Ⅳ　灰黄色土　　Ⅷ　黄色シルト

第７図　１区柱状土層図・遺構配置図

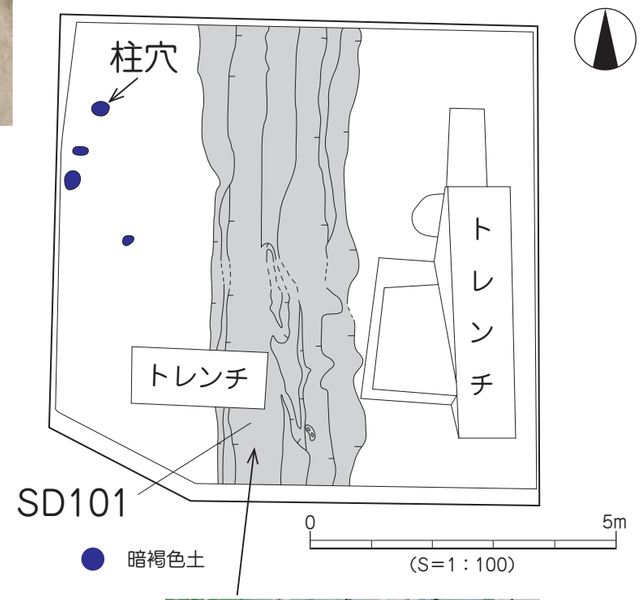


写真 11　SD101 完掘状況（北より）

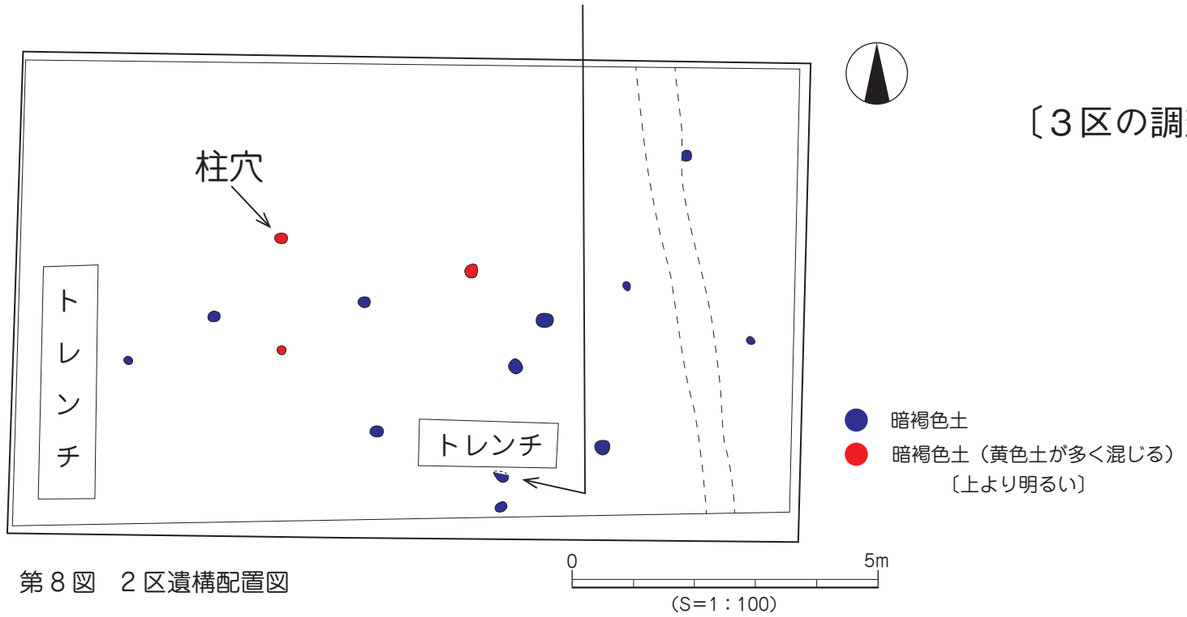
写真 12　２区第Ⅷ層上面遺構の完掘状況（北西より）

写真 13　２区柱穴の半截状況（北より）

写真 14　３区第Ⅷ層上面の遺構完掘状況（北より）

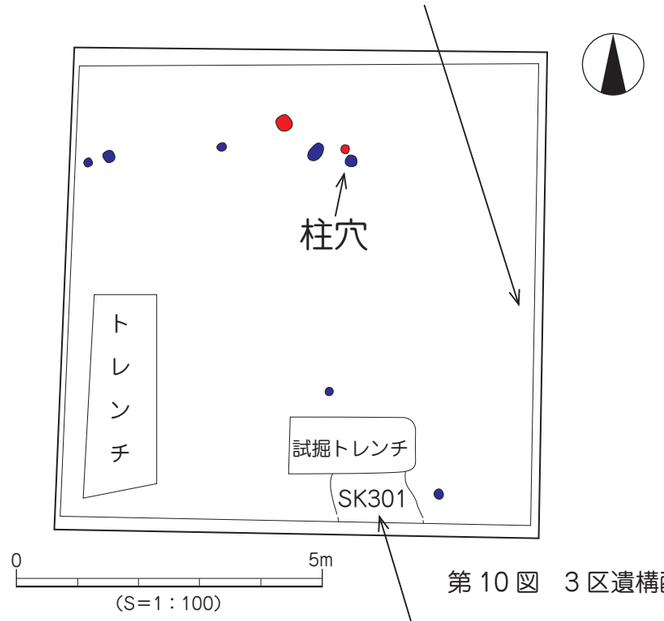
写真 15　３区礫群の検出状況（西より）

〔２区の調査〕

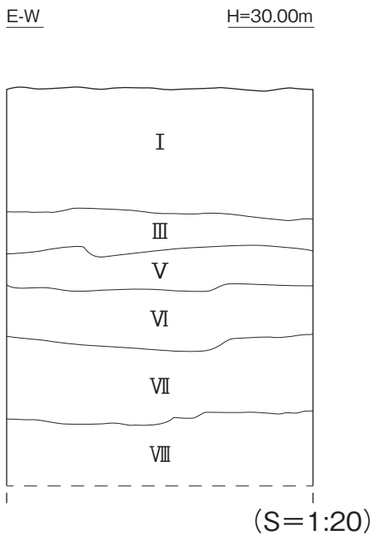


第８図　２区遺構配置図

〔３区の調査〕

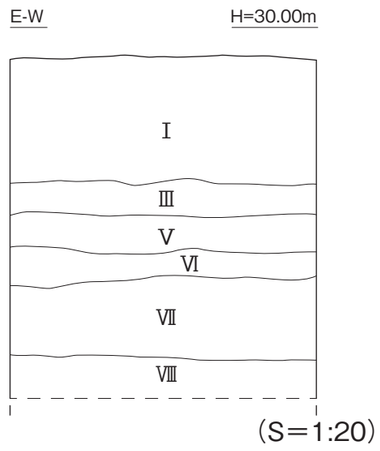


第 10 図　３区遺構配置図



第９図　２区柱状土層図

【基本層位】
第Ⅰ層：近現代の造成土
第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う客土
第Ⅲ層：中世段階の堆積層
第Ⅳ・Ⅴ層：古代～中世の堆積層
第Ⅵ・Ⅶ層：弥生～古墳時代の堆積層
第Ⅷ層：縄文時代の堆積層

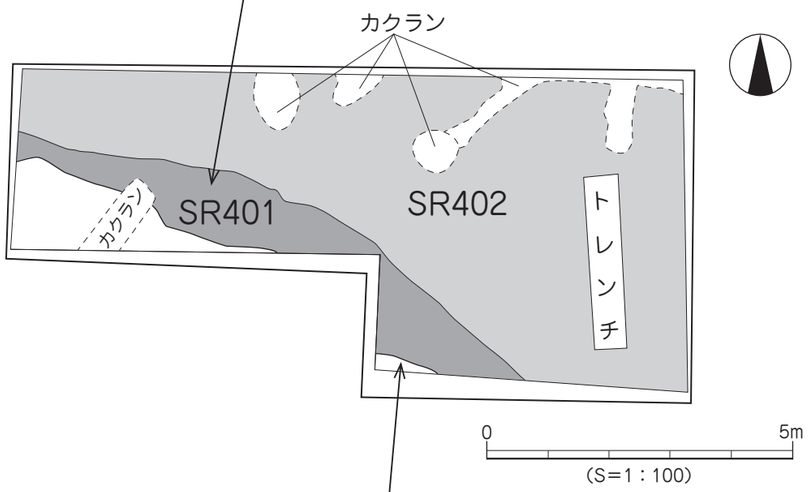


第 11 図　３区柱状土層図

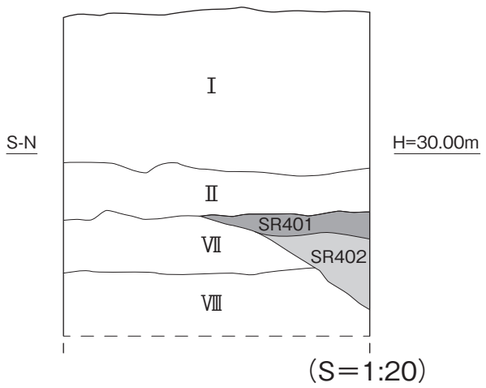
写真 16　３区 SK301 焼土検出状況（北東より）

〔４区の調査〕

写真 17　SR401 完掘状況（北より）

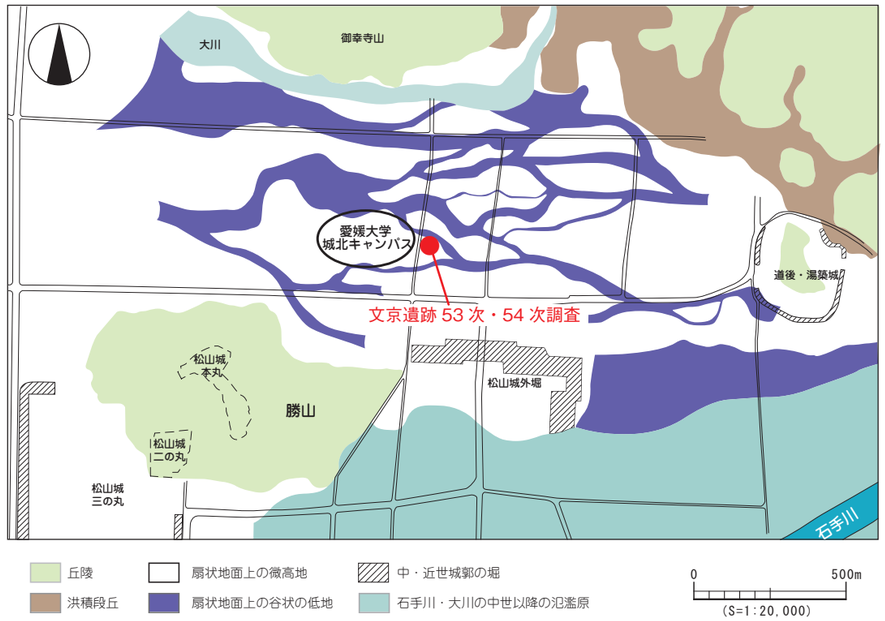


第 12 図　４区遺構配置図



第 13 図　４区柱状土層図

写真 18　SR402 の南岸（東より）



第 14 図　道後城北地区における旧地形

〔用語解説〕

・遺　構（いこう）　住居や溝・土坑などの不動産的な人々の活動の跡。
・遺　物（いぶつ）　土器・石器など過去の人々が残した動産的なもの。
・遺　跡（いせき）　遺構や遺物が見つかる場所。

＜遺構名称＞

・Ｓ　Ｄ　溝
・Ｓ　Ｋ　土坑（ものを貯蔵する穴・ゴミ穴）
・柱　穴　柱を建てるために掘られた穴
・Ｓ　Ｒ　自然流路
・カクラン　現代の穴

＜遺物名称＞

・縄文土器（じょうもんどき）　日本列島で縄文時代に作られた土器で、表面に縄目の模様がついたものが多く見つかっています。

・弥生土器（やよいどき）　色調は赤褐色などで、摂氏 600 ～ 900℃で焼かれた素焼きの土器で、弥生時代に使われた。

・土 師 器（はじき）　弥生土器の流れをくみ、古墳時代から江戸時代まで使われた赤褐色の素焼きの土器。

・須 恵 器（すえき）　青灰色の硬く焼き締まった土器で、古墳時代の中頃に朝鮮半島から伝わった焼き物。

・石　鏃（せきぞく）　石を材料として作られた鏃（やじり）で、主に狩猟具として使われた。

・スクレイパー　剝片に細かな調整を加えて刃部を作り出したもので、主に動物の解体・加工に用いられた。